

ビタードロップ

Hana & Kiyotaka

七福さゆり

Sayuri Shichifuku

termity



エタニティ文庫

1 王子様と少女

——それは、キラキラとした……まるでドロップみたいな、甘い恋の思い出……

「暑い」

小学三年生の夏休みが始まった。けれど特にどこかに連れて行ってもらわなくても、友達と遊ぶわけでもなく、私は母が掃除機をかける傍ら、ただ暑い暑いと連呼し、ダラダラと床で転がっていた。

だらしないと母にお尻を叩かれても、ちよつとした反抗心が生まれてしまい、そのまま床に転がり続ける。

ジリジリと何もかもを焼き尽くしてしまいそうな季節。セミもこの暑さにやられたのか、心なしか元気がない。こちらまでつられて元気がなくなってしまうそうだ。「ただいま！」

玄関から、この蒸し暑さをかき消すようなカラリとした声が響く。

「あら、うるさいのが帰ってきたわね」
母が文句を言いながらも嬉しそうに笑う。私はその声で背筋をシャキッと伸ばした。
やっとな帰ってきた!

それはずつと待っていた、東京の大学に行っている大好きな兄の声だった。
「もう、こんな時だけシャキッとするんだから」

母の小言を無視し、私は部屋を飛び出して玄関へと向かう。

「学お兄ちゃん! お帰りなさい!」

「花、ただいま」

荷物を置き両手を広げてくれた兄に、思い切り飛びついた。

久しぶりに会った兄は、お正月の時よりも少し大人びて見えて、ちょっと気恥ずかしい。

「お兄ちゃん汗びっしょり!」

「暑いんだから、仕方ないだろ?」

「やだ〜!」

兄が額の汗を私で拭おうとするので、必死に抵抗する。

こんなじゃれ合いもお正月ぶり、自然と笑みがこぼれてしまう。

兄は会うたび必ず「元気にしてたか?」「宿題はちゃんとやっているか?」とお決まりの台詞を口に出す。そして私はその質問に、元気にはしていたけれど宿題はやってい

ないと、これまたお決まりの台詞を返すのだ。

そして宿題をやっていないのは、兄に教えてほしいからというものもある。

いつも学校から出される宿題は、父や母に聞いたり、友達に聞いたりして何とかこなしているけれど、夏と冬の長い休みの宿題は別。

やっていなければ兄に構ってもらえる。兄と一緒にいられる時間を作るために、わざとやっていないのだ。

毎年繰り返されるこのやり取り……けれど、今年は今までとは違った。

「ったく、お前は仕方のない奴だな。今年は俺の友達連れてきたから、こいつに教えてもらえ! 清隆、入っていいぞ」

玄関の外に誰かの人影があるのによく気付く。

曇りガラスを使っている玄関の窓からは、どんな人かわからない。

「お邪魔します」

知らない人の声に、人見知りな私はさっと兄の後ろに隠れて様子を窺う。
夏も冬も嫌い。極端に暑いのも寒いのも苦痛なだけだ。

——けれど八歳のこの日から、苦手だった夏は私にとって特別な季節となった。

「おう、遠慮しないで入ってこい」

兄の後ろには、王子様みたいな男の人が立っていた。少し明るい栗色の毛が、強い日差しひたすらの悪戯で金色に見えて、子供ながらに息を詰ませ見惚みとれてしまう。

「王子様……？」

王子様は呆あっけ気に取られた顔で、私を見つめた。

「アハハ！ 王子様だってよ、清隆！」

兄のからかうような声で我に返り、私は顔を真っ赤にして、俯うつむいた。

「わ、笑わないで！」

兄の背中を突ついて止めたのに、笑いのツボに入ってしまったのか、謝りながら兄は顔を真っ赤にして笑い続けた。

そんなに笑われるとは思わなかった。恥はずかしくて俯うついていると、王子様は兄の後ろに隠れている私を覗き込み、挨拶をしてくれた。

「こんにちは」

せっかく声をかけてくれたのに、私は口をモゴモゴと動かすだけで、うまく返事ができなかった。兄は基本的な挨拶にだけは厳しく、私を無理矢理自分から引き剥はがし、ちゃんと挨拶しろと言うように、王子様の前に立たせた。

王子様と目が合うと、自分の顔が瞬く間に真っ赤になってしまふのがわかり、また慌てて兄の後ろに隠れる。

引き剥はがされては、後ろに隠れるというのを何度か繰り返しているうちに、兄は痺しびれを切らし、私の頭を軽く叩く。

「花、いい加減にしろ。ちゃんと挨拶しなきゃ駄目だろ？」

叩かれてしまった頭をさすりながら、兄の後ろに隠れるのはやめ、おずおずと王子様の前に立った。

挨拶をしなくちゃ！ とは思うけれど、思えば思うほど何も言えない。恥はずかしくてついモジモジとしてしまう。

今すぐ走って逃げだしたい……そうだが、走って逃げてしまおうか、そう考えていると、王子様は私の前にしゃがみ込み、まるで本当の王子様のように切れ長の瞳を細めて微笑んだ。

「初めまして、花ちゃん。白柳清隆しろやなぎです。よろしくね」

返事をしなくてはいけなかったのに、言葉がでない。でも、王子様は呆れることや、怒ることはせず、優しく微笑みかけてくれている。

やっぱり本物の王子様みたい……

子供の私に、こんなに紳士的に振る舞ってくれる男の人は、生まれて初めてだった。

「こんにちは……て、寺谷花です」

私も勇気を出して、自己紹介をした。

「やっと言えたな。花、お前少しは人見知り直せよ？」

わかっていると言いながらふてくされてっていると、王子様がニッコリと笑みを浮かべる。

「花ちゃんって、可愛い名前だね」

その言葉に嬉しくなって、ふくれっ面が笑顔に変わる。

「よし、自己紹介も済んだし！ 花、たくさん遊んでもらえよ。あと、宿題も教えてもらっとけ！ こいつスゲー頭いいからさ」

「え!? お兄ちゃんが教えてくれるんじゃないの?」

「ああ、お兄ちゃん頭悪いから無理だ!」

軽く返されてしまった。

子供でもわかる。兄は私に勉強を教えるのが面倒なのだ。

そして王子様もわかってしまったようで、少し呆れた顔を兄に向けていた。

いつもなら酷いひどと怒るところだったけれど、今回は何も言えなかった。こんな素敵な人に勉強を教えてもらえるなんて、夢みたい！ ラッキーかも！

「僕でよければいつでも教えるから、言ってね?」

「! は、はい」

……だけど、緊張するからやっぱりお兄ちゃんの方がいいかも！ なんて複雑な思いで頭がいっぱいになってしまふのだった。



お兄ちゃんと王子様が、父や母と談笑している中、私は一人買ったばかりのドロップ缶を開け、一粒口に放り込む。

甘酸っぱいオレレンジの味を口いっぱい感じながら、王子様をこっそり盗み見た。

一緒に過ごしているうちに、ちゃんと話せるようになるかな。
どんな楽しい夏になるんだろう。

缶の中で、宝石みたいにキラキラと輝くドロップを見て、きっとこんな風にキラキラした夏を過ごせるだろうと、胸がいっぱいになった。

——王子様と出会えた夏は、私にとって一番大切な季節になって、夏が訪れるたびに彼の笑顔を思い出し、胸を焦がすこととなるのだった。

2 王子様との思い出

月日は流れ、あれから十二年が経とうとしている。

お昼前、私は自宅の郵便受けに入っていた一通の封筒を取り、はやる気持ちを抑えて自分の部屋へ続く階段をゆっくり一段一段上る。

早く中を見たいけれど、見たくない。

そんな矛盾する思いを抱えて最後の段を踏みしめた。部屋に入り、ハサミで丁寧に開封する。

「今度こそ……神様、お願いします！」

やっぱり見たくない。でも、見なくちゃ！

こんな思いで封筒を開けるのは、もう何度目になるのだろう。

……正直数えるのも嫌になってきた。

都合の良い時だけの神頼みはやっぱり駄目で、思い切って開けた封筒の中身はもう何度見たかわからない、不採用通知と私の履歴書が入っていた。

「また不採用……」

あの甘いドロップみたいな思い出から十二年が経った今、私は二十歳になった。

小学校から高校までは田舎で暮らしていたけれど、東京への大学進学を考えていた時に、父もちょうど東京へ転勤することになり、家族で引っ越してきた。

ちなみに大学を卒業した兄は、旅行代理店に就職が決まり、今は海外赴任で単身アメリカへ渡り、たまに連絡が来るくらいだ。

大学は女子短大に進んだ。電車の乗り換えや人の多さに戸惑ったり、酔ったりして、初めは田舎者丸出しだった私だけれど、今ではすっかり東京に馴染んできた。

まあ、苦手は苦手なだけ……

十二年の月日は、環境だけでなく、容姿も大きく変えた。

昔は邪魔だからと短く切りそろえていた髪は、今では腰近くまで伸びていた。せっかく伸ばしたからと、傷まない程度にほんの少しだけ明るくした。癖のない綺麗に伸びた髪は特に目立つところのない平凡な私の唯一の自慢。

童顔なので、スッピンだと実年齢より幼く見られるのが悩みだったけれど、雑誌を見たり友達から教えてもらって化粧を覚えてからは、やっと実年齢ぐらいに見てもらえるようになった。

いつになったら膨らむんだろうと真剣に悩んでいた胸は、高校に入った頃にやっと成

長し始め、今では人並みより、ほんの少し大きいぐらい。中学生の時に、泣きながらいづつになったら大きくなるのかと母に相談したのが今となっては顔から火が出るほど、恥ずかしい思い出となっている。

環境や容姿、いろいろなものが変わった……

けれど心の中を大きく占めている想いは、小さい頃からちつとも変わらないでいる。

「花！ ちょっと来なさい」

階下から父の呼ぶ声が聞こえ、私は不採用通知をくしゃくしゃにしてゴミ箱に捨てた。

「今、行くー！」

ぶっきらぼうに返事をし、一つため息をついて部屋の明かりを消した。

父の声がしたりビングの扉を開けると、父が暗い顔をしてソファにどっかり座り込んでいた。

……なんだか嫌な予感がする。

このまま声をかけずに部屋に戻ってしまいたい気分になったけれど、バッチリ目が合ってしまったので、そうもいかなくなってしまった。

「ど、どうしたの？ お父さん」

「花、お前いつになつたらお父さんに彼氏を紹介してくれる気だ？」

「かれし？」

「そう、彼氏だ。まさか、いるのに隠してるんじゃないだろうな？」

親にこういった話をされると、なんだか気恥ずかしくて身構えてしまう。

こんな風に恋愛絡みの話を持ち出されるなんて滅多にないのに、こういう風の吹き回しだろう。

「紹介って言われても……紹介できる彼氏がいらないんだから、仕方ないじゃない」

正直に返すと、父が大きなため息をついた。

それは安堵のため息ではなくて、情けないとか残念だとか言いたそうなため息で、なんだかムツとしてしまう。

普通、私ぐらいの年齢の娘に彼氏がいなかったら、父親はホツとするとこるじゃない？

「お父さんはな、年頃なのに浮いた話の一つや二つ出てこないお前を心配してるんだ」

なんだか居心地が悪くて、目を逸らして、爪を弄るふりをする。

「今は恋愛よりも、就職する方が大切なんだもん」

そう！ 今の私は恋愛している余裕なんてこれっぽっちもない。

卒業してから大分経つというのに、未だに就職できないのだ。

「そうか？ まあ、それもそうか」

「そうそう、じゃあ私、履歴書仕上げちゃわなきゃだから、部屋に戻るね」
不幸中の幸いとはこういうことなのだろうか、就活を口実に父の攻撃から逃れることができた。転がるように部屋へ戻り、ため息をこぼす。

「はー……就職してなくてよかった」

……ってこんなことじゃダメダメ。またどこか受けなくちゃ。

何枚も履歴書を書いているうちに内容を全部覚えてしまい、今では何も見ないですべて書き上げることができるようになった。

……そんなの全然自慢にならないけれど。

自分で突っ込みながら、せっせと何枚めかの履歴書を作成し始める。作っている最中に、父の言葉を頭の中で思い出していた。

「彼氏、かあ……」

父には言えなかったけれど、私にはちゃんと好きな人がいる。



私が幼い頃に住んでいた所は、スーパーに行くよりも川に行く方が近いというぐらいのド田舎。家を出るとすぐに川があり、そこが私の遊び場だった。

友達の家は遠く、車を出してもらわないと子供の足では辛い距離なので、私はいつも一人遊びをすることが多かった。

誰かに遊んでもらいたくて仕方がない私にとって、夏休みに帰省した兄は最高の遊び相手。

「お兄ちゃん、早く川に行って遊ぼうよお」

「スマン。兄ちゃんはなあ、母さんに手伝い頼まれてんだよ」

手伝いを頼まれていると言いながら、縁側でぐうたらしている兄に、私はプープー文句を言った。

「つーかお前、宿題はちゃんとやってあるのか？ また夏休み最終日に泣くはめにしろ！」

話を逸らそうとして、兄はお決まりの台詞せりふで私を煙に巻いた。

毎年その台詞を出されると黙るしかないのだけれど、今年は違った。

「うん、終わらせたよ」

「マジ!? 珍しいこともあるもんだな」

兄が若干オーバーリアクションで驚く。

「今年は別に終わってなくてもよかったんだけどな。清隆に頼めばいいし」
王子様の名前を出され、心臓が跳ねる。

私だって本当は王子様に教えてもらいたかったけれど、わからない問題は友達に電話で聞いて必死に終わらせてしまった。だって、こんな問題がわからないなんてと呆れられたり、字が汚いなんて思われるかも！ などといろいろ想像していたら恥ずかしくなって、教えてもらうのはやっぱ無理だと思ったからだ。

「えらいじゃん。じゃあ、一人で遊んでこい！」

「いやー！」

兄にグイグイと背中を押され、嫌だと駄々をこねる。最初はじゃれ合いを楽しんでいたけれど、私があまりにしつこくするので、兄がだんだん面倒臭そうな顔を始めた。それが面白くなくて、更にしつこくしてやる。

「花ちゃん、僕と一緒にじゃダメかな？」

「！」

心臓が飛び出るかと思った。もともと人見知りが激しい方だったけれど、王子様に声をかけられるなんて、なおさら緊張してしまう。兄の後ろに隠れようとしても、ヒラリとかわされて逃げ場がなくなってしまった。

「お、清隆。散策は済んだのか？」

「ああ、すごくいい所だね。空気が美味しいよ」

何もない田舎なのに、王子様に褒めてもらえると、特別な場所に感じられるから不思議。

王子様のサラサラ揺れる柔らかそうな髪や、綺麗な顔立ちにほんやりと見惚れてみると、兄に背中を押されてしまった。

「じゃあ、遊んでこい！」

「え、えっと……」

嬉しいけれど何て言ったらいいかわからなくて、口をバクバクと動かしたあと、俯いたまま小さく頷く。そんな私の様子を見て、兄はニヤニヤと笑った。

「お前、何黙ってたんだ？ 早く行ってこいよ」

「お、お兄ちゃん……うるさいっ」

「うわー兄ちゃん傷つくわ……。何この子、反抗期？」

兄に茶化され、私は風船のように頬を膨らませた。

子供だけれど、王子様の前で子供っぽくしたくない。

少しくらい背伸びさせてくれた方がいいのに……お兄ちゃんの馬鹿！

私を変な子だと思っていないかな、と王子様をチラリと盗み見ると、見惚れてしまいうるほど優しい笑顔を向けてくれた。

「じゃあ、行こうか」

恥ずかしくて真正面から見られない。

せつかく手を差し出してくれたのに、気恥ずかしさからその手を取ることができず、

ただ領いて無言のまま王子様を川に案内した。

……というより、黙って川に向かったら、王子様が後ろからついて来てくれたのだ。

「綺麗な川だね。あ、魚も泳いでるんだ」

「……うん」

せっかく二人きりになれて、王子様が話しかけてくれているのに、照れくさくてうまく話せない。もつとその綺麗な顔をよく見たいのに、見ているのがバレたらと考えると、ただただ自分のつま先を見つめるしかできなかった。

どうして学校で友達と接するように、話すことができないんだろう。

「あ……」

すると足元に、不思議な色の石を見つけ、すぐに拾い上げる。

子供の習性というか、遊び道具が自然の中のものしかなかったため、綺麗な石を見つけては拾って、こっそり集めていたのだった。

親にバレると捨てなさいと言われてしまうので、お菓子の空き箱に入れて、押し入れに隠してある。またコレクションが増えるとニマニマ笑っていると、王子様が私の顔を覗き込んだ。

「何か見つけたの？」

「！ えっと、石が……」

急に王子様に問いかけられて咄嗟とつさに答えてしまったけれど、石を集めているなんて変じゃないだろうか。ませているのかもしれないけれど、王子様が呆れていないかどうか子供心に心配で、ますます顔を見られなくなってしまふ。

けれど、王子様が発した言葉は、とても意外な言葉だった。

「へえ、石？ 見せてもらってもいいかな？」

戸惑いながらもおずおずと固く握った手を開くと、王子様が長い指で石を摘つまみ上げ、瞳をキラキラと寶石のように輝かせた。

子供ながらにその顔に見惚みとれ、ため息をこぼしてしまう。

「すごいね、こんなに綺麗な石が落ちてるなんて……」

自分を喜ばせようと思つて言った言葉ではと思つたけれど、キラキラと輝かせた瞳からはそんな風に思っているようには見えなかった。だから思わず王子様に聞いてしまふ。

「石が好きなの？」

王子様は、私と視線を合わせるように、しゃがみ込んでニコリと笑って答えてくれた。
「うん。好きでよく集めてるんだ」

目が合うと心臓が喉まで飛び出てきてしまったみたいに、一瞬息ができなくなる。

「花ちゃんのお兄ちゃんには、変な趣味だと言われるんだけどね」

ここに兄がいたら、足を蹴つてやったかもしれない。

王子様にそんな面白いことを言うなんて！

「変な趣味なんかじゃないよ！ 花も石が好きっ」

「花ちゃんも集めてるの？ 一緒だね」

そしてまた優しい笑みを浮かべて、王子様の大きな手が私の小さな手を持ち上げる。それはまるで童話の中の王子様が、お姫様の手を取る時の仕草のようで、ほんわりと見惚れてしまう。

王子様はそんな私の顔を真っ直ぐに見つめ、お礼を言っつてそつと石を返してくれた。

「あの……これ、あげる！」

「え？ でも、花ちゃんも集めてるんでしょ？」

「花はここでいつでもたくさん拾えるから大丈夫！」

子供ながらにとても必死だった。

恥ずかしくて顔が熱くなる。

要らないと言われたら泣いてしまいそう……

誰かの反応を待つのが怖いなんて、こんな気持ちは生まれて初めて。

返された石を再び差し出すと、王子様は少し考える仕草をして、その石を受け取ってくれた。

「ありがとう、大切にするね」

「！……うんっ」

その言葉を聞いた瞬間、胸の奥がギュツと掴まれたみたいに苦しくて、でもその苦しさが心地よかった。

もつと喜ぶ顔が見たい……もつと褒められたい。

私はその日以来、毎日川辺で綺麗な石を探し、王子様に渡すのが日課になった。

渡すたびに王子様は喜んでくれて、私はその喜ぶ顔を見るたびに、胸の中で温かくてちよつと切ない気持ちが増えていくのを幼心に感じたのだった。

けれど、照りつけるような太陽は、日に日に弱くなって……

「もうすぐ東京に帰らなきゃな……」

兄と王子様と私で縁側に並んでスイカを食べていた時、兄がポツリと呟いた。

王子様は兄の呟きに、黙って頷く。

私は思わず食べていたスイカを種ごとゴクンと呑み込んでしまった。いつもなら種を呑んじゃったと大騒ぎするところだけど、今日ばかりはそんなことどうだってよかった。

「もう、帰っちゃうの……？」

否定してほしくて、帰らないと言っつてほしくて、聞いてみた。

「もうすぐ夏休みも終わるからな。今年の夏は清隆もいたし、いっぱい遊んでもらえて楽しかっただろ？」

「うん……」

楽しかった。けれど、今は泣き出してしまいそうだった。

もう、会えなくなってしまう。もうあの笑顔が見られないんだ……

自分の前からいなくなってしまうと考えると胸を痛めた瞬間、私は初めて王子様に恋をしているのだと自覚した。



幼かった私は、淡く芽生えた恋心を抑えることができなくて、兄と王子様が東京に帰ってしまいう日、勇気を出して告白をした。

緊張しすぎていたせいとか、どんな状況で告白をしたのかはあまり覚えていないけれど、夜遅くに王子様と川辺で二人向き合っていたことだけは覚えている。

「私をお嫁さんにして下さい……！」

その言葉に、王子様はニッコリと笑って、こう答えたのだ。

「大きくなったらね」

小さな子供を宥めるための言葉。けれどその時は、その言葉がキラキラと宝石のように輝いて、心の中にストンと落ちてきた。

きっと大人になったら、王子様の……清隆さんのお嫁さんにしてもらえる。

そう信じて、私は清隆さんがいなくなった季節を過ごしてきた。

3 思い出の恋と現実

——あの日の恋心は、今も私の中で色づいて、輝いている。

人に話せば笑われてしまうのだけれど、私は十二年前のあの甘い恋を忘れられずにいた。

中学、高校と周りが恋をして青春を楽しむ中、私は十二年前のことを繰り返し思い出しては、胸を焦がしていた。

女子短大に進学してから、ちよつとしたきっかけでそのことを友達に話してしまい、今まで恋人がいなかったこととダブルで驚かれ、過去の恋よりも今を見た方がいいと、何度か飲み会や合コンに連れて行かれたこともあった。

けれど目の前の男性と話すほどに清隆さんの姿が浮かび、失礼だと思いなながらも比べてしまつて、またあの夏の日を思い出してしまふのだった。

何日も、何か月も、何年も……私の心は、あの日に置き去りのまま。

大人になった今、あの日の約束は子供だった私を宥めるためについた嘘だと気づいてしまつたけれど、あの日感じた私の恋心は確かに本物で、今もその想いは私の中で輝き続けている。

いつか会えたら……そう思って兄に、清隆さんの所在を聞いたことがあつたけれど、大学を卒業してからは全く付き合いがなくなつてしまつたらしく、私と清隆さんが再会できる可能性は今のところゼロ。

けれど、諦めて他の恋を探す気には全くなれなかつた。

やっぱり、十二年間温め続けた清隆さんへの想いを大切にしたい……

ほんやりと昔のことを考えているうちに、履歴書が何枚か完成していた。

どこの企業に応募しようかとパソコンを起動させ、インターネットで企業を調べながら、またほんやりと清隆さんのことを思い出す。

清隆さんは兄と同級生だから、今は三十二歳のはず。

彼は今どこで何をしているのだろう……

どんな仕事に就いているのか、晩婚化の時代とはいっても結婚適齢期なわけで、もしかしたらもう結婚してしまつているのかもしれない。

結婚していなくても彼女くらいいるのかも……

だってあんなに素敵な人、放っておかれるはずがない。

企業を調べていたはずだったのに、いつの間にかソーシャルネットワークサービスのページを開いていて、白柳清隆と打ち込んでいた。

検索結果は似たような名前の人や、全然関係のない記事ばかり。

わかつていた……だって、暇さえあれば清隆さんの手がかりが掴めないかと、こんなことはかりしているのだから。

清隆さんはこういうのに興味がなさそうだとか、何になら興味があるのだろうとグルグル考えているうちに時間は刻々と過ぎてしまい、いつの間にか机に突っ伏して、せっかく書き上げた履歴書を枕に眠つてしまつていた。

せめて夢で会えたらいいのにと願うけれど、夢でも清隆さんに会うことはできなかつた。



数週間が経ったある日……
その日もいくつかの企業の面接を受け、くたくたに疲れ切って家に帰ると、またもや父に呼び出されてしまった。

「あの一……話って何？」

おまけに私は今、正座をさせられている。

いつも穏やかな父の顔が今日は随分厳しく見え、なんだかこの前より嫌な予感があった。就職活動がうまくいっていないことを怒られてしまうのだろうか。けれど少し前に焦らずにゆっくり頑張ればよいと言われたばかりだ。

生唾を呑み、父の言葉を待つ。

正座させられてから十分ほどが経ち、足が少し痺れてきたと感じた時に、父はようやく重い口を開いた。

「花、お父さん……人間ドックに引つかかって、今度再検査することになった」

「え、そうなんだ」

こういう話によく聞くので、さりと流した。

もしかしたらこれは本題に入る前のワンクッションなのかもしれない。

気を引き締めた身構えていると、父は肩を震わせ嗚咽し始めた。

「え……えええ!？」

突然の涙に狼狽うろたしてしまう。父が泣くところを見るなんて、生まれて初めてだ。

どうしたらよいのかわからず、ただただ眺めるしかできない。

確かに父は、健康なことが唯一の自慢だ！とよく言っていたけれど、再検査になってしまったことがそんなにショックだったのだろうか。

初めて見た父の涙に、理由もよくわからずもらい泣きしてしまいそうになった。

「な、泣かないでお父さん……」

とりあえずテーブルの上にあったティッシュに手を伸ばそうとすると、父は自らの袖で涙を拭き、私を真っ直ぐに見た。

「お父さんはな、いつまでも生きているわけじゃないんだ。お父さんが死んだらお前、どうやって生きていくつもりなんだ？」

「そんな、再検査になったぐらいで大げさだよ？」

「人間いつどうなるかなんてわからないんだ！花、お父さんはな、生きていくうちに、お前の子供……孫を見てみたいと思ってるんだ」

「……ま!？」

あまりに突拍子もないことを言うので、返す言葉が失ってしまふ。

急に孫の顔が見たいと言われても、相手がいないし、清隆さん以外は絶対に嫌だ。

「わ、私、まだ二十歳だよ？子供を産むなんて……結婚なんて早すぎるよっ」

「でも、お前の同級生は、この前結婚したじゃないか。お前、早くなんてないって言うてたよな」

私はグッと喉を詰まらせた。

つい先日、同級生の結婚を喜んでいた私に、父が二十歳で結婚なんて早い！と言ってきたので、成人してるんだから早くなんてないと言ったばかりだったのだ。

「あの時の言葉は、嘘だったのか？ あの時の言葉は上っ面だけだったのか？」

「嘘なんかじゃないよ！ でも、あれは友達の話で、私はまだ結婚なんて考えられない……」

父が黙り、ジッと考え込む。

納得してくれたのだろうか。

下手に何か言えば、ああいえばこういう式に、また何か言われてしまうかもしれない。なので自分からは何も言わない方がいいと、父の言葉を待つことにした。

「花、見合いをしてみないか？」

「……は!？」

「もしかしたら、お前が夢中になれる相手に出会えるかもしれないぞ？」

父の目がキラキラと輝いている。

そんなに期待されても困る！ お見合いする気なんて全くないのに……

そもそも私は、清隆さんという好きな人がいるのに！

「やだ!」

即答すると、やっと止まったと思った父の目から再び涙がこぼれ、ギョツとしてしまう。

「お父さんは、お前が心配なんだよ。お前はそっかしいから、絶対一人では生きていけない……お父さんが死んだら……お前は……」

まさに泣き落としとは、このことを言うのではないだろうか。

「わ、わかった！ わかったから泣かないですよ!」

「本当か!？」

父の顔がまたパツと明るくなる。

「……あれ、もしかして嘘泣き!？」

「でも、私にだって都合があるんだからね。この前受けた就職試験が受かってたら、孫どころか結婚する暇もないだろうし……」

お見合いをする気がこれっぽっちもない私は、なんとか口実を作ろうと必死だった。

「じゃあ、就職試験に落ちていたら、絶対に見合いをしなさい。わかったな?」

父の言葉に、私は洪々頷いた。

……先ほども言ったけれど、お見合いをする気なんて私にはこれっぽっちもない。

洪々頷いたのは、勝算があったからだだった。

この前受けた就職試験は、今までの中で一番手ごたえがあった。筆記試験は必死に勉強したかいがあって、自己採点でかなりの点を取っていたし、面接も今までの経験を生かして、落ち着いて話すことができた。

そして極めつけに「おそらく貴方で決まると思います」と面接官のお墨付きまで貰えた。就職はすぐ目の前にあるのは間違いない！

父が喜んでいるのに申し訳ないけれど、お見合いがなしになるのはもう目に見えてい

る。

ごめんね、お父さん……



人生、そう簡単にはいかないという言葉を最初に言ったのは、誰なんだろう。

ああ、本当にそうなんだ……と鈍く痛む頭で、ほんやりと思う。

この前受けた面接の結果が、昼に郵便で送られてきた。

お見合いをすると約束をした日に、お互い不正がないようにと、送られてきた封筒は、

父と私が一緒にいる時に見る約束をしていたので、さっさと開けてしまいたい気持ちを抑えて、父が帰ってくるのをじっと待った。

封筒が届いた時、父にすぐメールで「面接の結果が送られてきた」と報告したからか、父はいつもの時間より大分早く帰宅した。

いつもなら父が帰って来るとすぐに夕食の時間になるのだけれど、今日は結果を見るのを先にしようということになった。

「もう！ できたての料理を食べてほしいのに！」

「ご、ごめんね。お母さん」

「母さん！ 少し静かにしていてくれ」

父のその言葉に、更に怒り出す母を尻目に、私はハサミで丁寧なその封筒を開けた。結果は採用だとわかりきっているけれど、なんだか緊張してしまう。

いつもは不採用通知ばかり見ているから、採用通知にはどんなことが書かれているのだろう、記念に写真を撮っちゃおうかな？ なんて考えながら、出した書類には……

「……う、嘘でしょ？」

浮かれて開けた封筒の中には、今まで何度も見てきた不採用通知が収まっていたのだった。

「嘘……だよね？」

あまりに信じられなくて、もう一度つぶや私を無視し、父は満面の笑みを浮かべる。
 「今度の土曜日は空けておきなさい。約束通り見合いをしてもらうからな」

……今度の土曜日というと、あと二日しかない。

父がニヤリと笑うのを見て、ピンと来てしまった。

「……お父さん、私が最初から落ちるって思ってた!」

「当たり前だ。この就職難のご時世に、そう簡単に就職なんてできるわけないだろう?」

父は再検査なんて必要ないんじゃないかと思うぐらい、調子がよさそうに見える。

そういえば、再検査はいつなのだろう。

聞いてみると、再検査はとくに終わっていて、しかも異常はなかったらしい。

「異常なしだったら、お見合いする必要ないでしょ!」

「今回は異常なしでも、これから先どうなるかわからないだろう!」

部屋中に父の怒鳴り声がビリビリと響き、父のこめかみに血管が浮き出る。

こんなに怒らせたのは久しぶりだ……というか怒りの理由がわからない。

なんで私、怒られてるの? そんなに怒らせるようなことなんて、言っていないのに!

「わかったから、怒らないですよ……」

「わかったとはなんだ!」

更に怒りだす父をなんとか宥なだめているうちに、夕飯を食べる気分じゃなくなった。

少し横になりたい……と言うより、寝たい。寝て、現実逃避したい。

「花、部屋に戻るの? ご飯は?」

「あとで食べるから、取っておいて下さい……」

疲れ切った私は、なぜか敬語で母に頼み、部屋へと戻ってきた。

「……なんでこうなるの!? あの面接官の嘘つき! バカバカ!」

やり場のない怒りを発散しようとしても、ちっともできずベッドに倒れ込んだ。

「うう……」

足をバタバタと動かし、枕に顔を埋めた。

お見合いなんて……ああ、どうしよう。

八つ当たりをするように、クシヤクシヤに丸めた不採用通知をゴミ箱に向けて思い切り投げる。外れてしまった不採用通知を見ながら、更に八つ当たりで枕をポフポフと叩いた。

目を瞑つぶれば、今でも清隆さんとの思い出の日々が色鮮やかに思い出せる。

こんなに好きな人がいるのに、他の男の人とお見合いをしなければいけないなんて……

「どこにいるの? 清隆さん」

問いかけてもわかるはずがない。

わかるのは、今すぐ清隆さんに会いたい……その想いで胸がいっぱいだということだ
け。

4 不本意なお見合い

来てほしくない日が来てしまうのはあつという間だ。

「花、すごく綺麗よ！」

「……………ありがとう」

いつもなら嬉しい土曜日の朝、私は早く起こされて、ヘアメイクと着付けを両方してもらえる美容室で、成人式さながらに振袖を着せられていた。

……………というか、成人式以上におめかしさせられている。

「お見合いって今時、ここまではしないんじゃない？」

想像していたのは、お見合いとは名ばかりの気軽な食事会だと思っていた。

なのにこれじゃ、昔のドラマに出てくるようなベタなお見合いスタイルだ。

「私もそうだと思うんだけど、お父さんが張り切っちゃってねえ」

「……恥ずかしいよ、こんなの」

美容室で着付けを先に済ませてヘアメイクをしている間、私はお客さんからジロジロと見られていた。成人式の前撮り？ とか、いいところのお嬢さんなのかしら？ などという、お客さんの声が聞こえてきて、恥ずかしくて今すぐ帰ってしまいたかった。

「私は普通の洋服でいいって思ったんだけどね」

父の張り切り具合に、母も若干引き気味のようだ。

「だったら、そうお父さんに言ってくれたらよかったのに……」

「あら、お父さん頑固なの知ってるでしょ？ 私が口を出してもねえ」

しらっと言われて、何も言えなくなってしまう。

どうしようもない思いが胸の中をモヤモヤとさせ、帯の苦しさもあつて気持ち悪くなってしまう。

「まあこんな機会減多にないしね。二度も振袖着られるんだから、ラッキーだと思っちゃいなさいよ！」

「ラッキーって……」

カラカラと母が笑い、私は思いつきりため息をついた。

鏡には、いつもより少しだけ綺麗な自分の姿が、虚しく映っている。

ラッキーなわけがない。なんとかして断らなくちゃ！ 清隆さん以外の男の人なんて絶対に嫌！ 頭の中はそればかりなのだから。

「花、綺麗だぞ！」

美容室で用意を整えて、外に出ると父が満面の笑みで待っていた。

「あ、ありがとう」

一応お礼を言う私の顔は、父の笑顔とは反対に、思い切り引きつっている。

そういえばどこでお見合いをするのだろう。興味がなさすぎて聞いていなかった。相手の顔や経歴も、全然わからない。

帯の苦しさで気が遠くなりそうになり、できれば場所が遠くなければいいなあと思いながらも父に聞いてみることにした。

「ねえ、どこでお見合いするの？」

「気になるのか？ 着いてからのお楽しみだ」

上機嫌に言われてしまい、また気が遠くなりそうになった。

これじゃまるで私が、お見合いを楽しみにしてるみたいじゃない。

……父には悪いけれど、ちっとも楽しめない。むしろ憂鬱だ。



そうして父が自信満々で私を連れてきた場所は、わが家とは縁遠い高級料亭だった。

「あらあ、すごい料亭ね」

母が年甲斐もなくキャピキャピとはしゃぎだす。母も着物姿なのに、どうしてこんなに元気なのだろう。

一方、母よりずっと若い私は、絶句していた。

驚きすぎたせいでマヌケな顔をしている私に、父はニッコリ微笑みかけてきた。

「どうだお見合いっぽいだろう？」

「こ、これじゃ昭和のお見合いスタイルだよ！ もっとホテルで食事とか、軽い感じの
だと思ったのに！」

「やるからにはこのぐらいしなないと！ 早く孫の顔、拝ませてくれよ？」

ここまで本気だったなんて……あ、頭が痛い。

逃げ出したい気持ちを抑え、私は父と母の背中を追った。

通された部屋は見るからに特別です！ というような和室だった。

もうお見合い相手は着いているのだろうかと部屋を見渡したけれど、世話人しかまだ着席していなくて少しホッとした。

どうやら心の準備をする時間はあるみたいだ。

高そうな花瓶には見事な花が飾られていて目を惹く。
 ……あれ、胡蝶蘭だよね!? すごく高いはずなのに、あんなにたくさん!
 そして窓からは、美しく剪定された松の木や、錦鯉が泳ぐ立派な池が望める。
 まるで別世界に来てしまったみたい……

そこに引き込まれてしまいそうな私を現実に戻すのは、帯の苦しさだった。

「花! 苦しそうな顔をするのはやめなさいね」

母に小声で怒られてしまったけれど、こればかりはどうしようもない。

だって、本当に苦しいんだから!

これじゃせっかくの料理もろくに食べられそうにないと涙目になっていると、世話人がハンカチで汗を拭きながらチラチラとこちらの様子を窺っていた。

「すみません、仕事で遅れているみたいでして……」

暑いから出た汗ではなく、たぶん冷や汗だろう。

無理もない。お見合い相手がかれこれ一時間以上遅刻しているからだ。

「いえいえ、仕事なら仕方ないですよ」

私が口を開く前に、父がしゃべりだした。

いつもは気が短いくせに、よっぽど上機嫌のようだ。

私はただただ俯いているばかり。

こうしている方が、世話人やお見合い相手からも感じ悪く見えるに違いないと思ったからだ。

自分から断るよりも相手から断られた方が気が楽だ。それに父も、向こうから断られ
 たら仕方がないと諦めてくれるだろう。

できるだけ相手に好印象を与えないようにしなければと、きつい帯のせいでほんやり
 してしまいう頭の中で考えた。

すると小さなノックが聞こえ、世話人が汗を拭きながら襖へと近づいた。

「お客様、お連れ様にご到着致しました」

「ああ、よかった。通して下さい」

世話人がホッと胸を撫で下ろしているのとは裏腹に、私の方は一気に緊張が高まった。
 いやいよお見合いが始まってしまふ。

嫌な奴に見えるようにしなくちゃ、と顔をしかめていると、きちんとしなさいと言わ
 んばかりに、父に後ろから背中をピシヤリと叩かれ、私は洪々背筋を伸ばした。

早く終わらせて、この苦しい帯をさっさと解いてしまいたい。

ほんやりとそんなことを思いながら、開いた襖の先に注目する。

……ええ?

「遅れて申し訳ありません」

耳を通る低くてどこか優しい声。

ほのかに明るい栗色の髪の毛が、窓から差し込む光の悪戯で、少しだけ金色に見える。印象が悪くなるよう目を合わせないと決めていたのに、どうしよう……彼から目が離せない。

だって彼は似すぎて……

「花、そんなにジロジロ見では失礼だろ？」

父が私にだけしか聞こえないよう小声で注意するけれど、やっぱり目が離せない。彼が席につくまでの一連の動作に、幼い頃の気持ちりが淡く蘇る。

どうかしている。

もう二度と会えない思い出の王子様と、お見合い相手を重ねてしまうなんて……

「では改めまして、自己紹介から始めましょうか」

世話人の一言で現実に戻される。

そうだ、私はこのお見合いを断るつもりで来たのだった。

慌てて目を逸らし、ただひたすら膝に置かれた指の先を見つめた。

「花、お前からご挨拶しなさい」

父の言葉に従い、テンプレートのような自己紹介を思い出す。

就職活動の面接の時よりもつまらない、やる気のない自己紹介。

「初めまして、寺谷花です。二十歳で、現在は就職活動中です」

「……と、とても可愛らしいお嬢さんですね、今は就職難ですから大変でしょう」

笑みの一つも浮かべずに言ったつまらない挨拶に、世話人が苦笑いを浮かべ、これまたありきたりなつまらない感想を述べた。

では次はこちらもご挨拶を、と世話人が彼に合図を出す。

ああ、できることなら自己紹介をしないでほしい。

そうしたら、目の前にいるお見合い相手を清隆さんだと思って、少しでも夢を見るこ
とができるのに。

「初めまして、白柳清隆と申します。本日は遅れて申し訳ありませんでした」

「え!？」

思わず膝立ちしてしまい、テーブルに置いてあった一口も飲んでいないお吸い物が
入ったお椀をひっくり返してしまった。

「あららっ、この子ったら!」

「花……! 何してるんだ」

両親や世話人がそれに驚いている中、私は彼の顔を食い入るように見つめる。

……やっぱり、清隆さんなの？

心臓が爆発しそうなほど脈打ち、体中の血液が沸騰してしまいそうだった。

さっきぶつけた腿ももがズキズキと痛む。痛いつてことは、夢じゃないんだ。目の前にいる人は、恋焦がれていたあの人。

ずっと会いたかった、ずっと好きだった相手がお見合い相手だったなんて、こんなドラマやベタな恋愛小説みたいな話が、本当に自分の身に起きるなんて信じられない。

「火傷やけどはしませんでしたか？」

「……え？ あ、はい」

「よかった。そちらは汚れてしまいましたし、もしよければ僕の隣へ来ませんか？」

「そうだな！ そうさせてもらいたくない、花」

弾む父の声に背中を押され、戸惑いながらも憧れの人の隣へ向かう。

座る仕草が変じやないだろうか、とか化粧も崩れてきても、とか頭の中はかなりのパニックに陥おぼっている。

清隆さんの視線を感じて、緊張と恥ずかしさで心臓が痛くなってしまう。

「し……失礼します」

「どうぞ」

ニッコリと微笑まされると顔が熱くなり、手でバタバタと扇あおぎたいくらい。

やっとのことで隣に座ると、爽やかな柑橘系の香りが鼻をくすぐった。

大好きな夏みたいな匂い……清隆さんの香水だろうか。

「清隆くん、その髪は染めているのかな？」

仲居さんがテキパキと片付けをするのを待つて、父が品定めするように清隆さんに質問をぶつけた。

「いえ、これは地毛です。父がフランス人と日本人のクォーターなので……」

何か失礼なことを聞いてしまうのではないかと、ハラハラしている私の気持ちを無視し、父は清隆さんのご両親や兄弟のこと、仕事は何をしているのかなど、うっかりすると質問内容を忘れてしまいそうなほど、清隆さんを質問攻めにしていった。

「両親とは今は疎遠になってしまっているのですが……実の父は、幼い頃に母と離婚してからどこにいるのかわかりません。母はおそらく都内に住んでいると思います。あとは兄が一人。まあこちらも最近連絡をとっていません……仕事の方は広告代理店で一応部長をさせて頂いております」

清隆さんは質問を一つも忘れることなく、淡々と答えた。

「まあまあ、部長さんなの？ すごいのねえ」

「まだ三十代だったよな？ 大したものだ」

「今年で三十二になりました。運がよかったです」

母がニコニコと笑い、父も思いっきり食いついた。知りたかった好きな人のことを父がどんどん聞き出していつてしまおう。

「……私も話をしたい。」

けれど何から聞いていいかわからなくて、握った手にじんわりと汗が滲む。

「花、お前も何か話さないか」

「そうよ？ せっかくなんだから」

追い打ちをかけるように両親に促され、なおさら焦ってしまおう。

「え、えっと……その……」

どうしよう。焦れば焦るほど、思いつかない……

「ゆっくりで大丈夫ですよ、こういった場では、緊張してしまいますしね」

「あ、ありがとうございます」

声は十二年前よりも少し低い。けれど、笑顔はあの時のまま……この人は本当に私の好きな人なんだろうか、十二年前に出会った王子様？

私は深呼吸をして、祈るような思いを込めて質問した。

「寺谷学という名前に、聞き覚えはありませんか？」

「寺谷学？」

清隆さんは、顎の下に手を当てて考える。

考える仕事まで綺麗で、思わず見惚れてしまおう。

「は？ なんで学の名前なんか……清隆くんがうちの息子を知ってるわけないだろう？」

父の言葉を無視して、私は清隆さんの答えを待つ。

答えが出るまでの数秒間が、私にとっては何時間ももの長い時間に思えた。

「……ええ、聞き覚えがあります。大学時代に親しくしていた友人の名です」

疑いが確信になった。この人なんだ……

やっと会えた。十二年間思い続けてきた大好きな人に、やっと会うことができた……

目の奥が熱い。これ以上話したら泣いてしまいそうで、私はそれ以上言葉を続けられ

なくなってしまう。

「息子の友人だったとは！ そういえば昔、お会いしたような気がする。な、母さん」

「ええ、どこかで見たことがあると思っただけ、学のお友達だったのね」

「お互い月日を重ねて、思い出すのに時間がかかってしまいましたね。あの時は大変お

世話になりました」

両親と清隆さんが談笑する傍ら、私は緊張で冷や汗をかいていた。

兄のことは覚えているようだけど、私については覚えてくれているのだろうか。

兄のことは聞けても、いざ自分のこととなると怖くて聞けない。

人は贅沢なもので、次から次へと欲深くなってしまおう。

さつきまでは会えただけで嬉しいと思っていたのに、今では私のことを覚えていてほしいという願いに変わってしまったている。

「これも何かの縁だな！ これを機に息子共々、娘をよろしく願います」
父の言葉に、一気に現実引き戻された。

そうだ。これはお見合いだった。

お見合いは、結婚相手を探すためのもの。もしかしたら夢だった清隆さんのお嫁さんになれるかもしれない！

「……あ、あの！」

唸^{つぐ}んでいた口は、無意識のうちに開き、その場にいた全員の注目を集めた。

——清隆さんのお嫁さんになりたい、好きな人ともう離れたくない……

「私と……結婚して下さい！」

静かな料亭に、驚きの声が響いた。

5 初デート

お見合いの日から一週間が経った。

あの日、自らプロポーズしてしまったけれど、世話人や母はもちろんのこと、あれだけお見合いを勧めていた父までもが、こんな短い間に結婚を決めるのはよくないと、窘^{たじま}めてきた。

今すぐにも結婚してしまいたかったのに、世話人と両親に、お互いのことをよく知るには、何度かデートを重ねた方がよいと説得された。唇を尖らせていると、清隆さんにもそうした方がよいと言われてしまったので、私は自分だけ盛り上がっていたのが少し恥ずかしくなつてしまい、素直に頷いた。

私のことを覚えていないとしたら、勢いだけで結婚したいのだって思われているのかもしれない。

「そんなんじゃないのにな……」

デート当日、私は清隆さんが指定した待ち合わせ場所の駅前に、かれこれ一時間前から立っていた。

駅前という場所柄、たくさんの人が行き交っていて、根が田舎者の私には未だに慣れない光景。

いつもならウンザリしてしまうこの光景も、このどこかに清隆さんがいると思うと胸が高鳴る。

そろそろ待ち合わせ時間が近づいているのに気付いき、私は鞆の中から手鏡を取り出した。

「私……変じゃないかな」

もう何度したかわからない鏡チェックを行う。

今日のためにいろいろな店を回って試着し、何時間も迷いに迷って大人っぽい落ち着いた色の丈が短すぎないワンピースを購入した。

靴は持っている中で一番フェミニンで、歩きやすいもの。本当は新調したかったけれど、靴擦れなんて起こしたら、清隆さんに迷惑をかけてしまうと思っただけ我慢した。

鞆くらは背伸びしたくて、友達に頼み込んでクロエの鞆を貸してもらい、アクセサリーはできるだけ子供っぽく見えないシンプルなものにした。

「なんか、私っぽくない。大丈夫かな？」

鏡の中からはいつもより背伸びした姿の自分が、不安そうに覗きこんでいる。

不安だけれど、楽しかった。

友達がいとも好きな人のために努力したり、オシャレするのが楽しいと言っていたのが今になってすごくわかる。

好きな人の目に、少しでも綺麗に映りたい。

こんな風にオシャレしてて、楽しかったことは今までになかった。

「いきなり背伸びした格好して、やっぱり変かな？」

「変じゃないよ？ 大丈夫、ちゃんと可愛いよ」

「え……きゃあ!？」

鏡にいきなり清隆さんが映り込んで、思わず手鏡を落っこしそうになってしまい、焦った。

「アハハ、驚かせちゃったかな？」

「お、大きな声を出してごめんなさい」

緊張して、謝る声すら上擦うわすってしまう。

……これじゃ全然子供の頃と変わらない。もっと上手に話したいのに。

十二年経っているのにもかかわらず、あまりの成長のなさに心の中で自分にガツカリした。

「いいよ、驚かしたこつちが悪いんだから……じゃあ行くのか？」

清隆さんに促うながされ、憧れの人と十二年ぶりに並んで歩く。

子供の頃は清隆さんの顔が随分遠かったのに、今では少し近くなったのが嬉しくて、ついチラチラと見てしまう。

あまりに見ていたせいで、視線を感じたのだろうか、私の方を見た清隆さんとパツチリ目が合ってしまった。

「あ……えっと……」

見ていたのがバレてしまつて、顔が熱くなる。

どうしよう、恥ずかしい。

言い訳をしようとしても、ちつとも思いつかない。

「好き嫌いとかある？」

清隆さんはそんなこと気にしていないようだった。

慌てて首を振ると、笑顔を向けられて、目の奥が熱くなつてしまう。

どうしよう、こんなことだけでも泣きそうになるなんて……

「じゃあ、僕がよく行つてゐる店でもいいかな？」

「はい！」

涙ぐんでしまったのに気付かれないように、できるだけ元気に返事をした。



清隆さんが連れてきてくれたのは、私には縁遠いお洒落しゃれなお店だった。

ホテルみたいなビルの最上階にあつて、窓から見える夜景がとても綺麗。

照明が暗めなので、更に煌めいて見える。

こんな綺麗な夜景は今まで見たことがなくて、言葉を失い、ついつい見入ってしまった。

「宝石みたい……」

思ったまま素直に呟つぶやいてしまい、子供っぽいことを言ってしまったと口を押さえる。

……やつてしまった。

私が顔を真っ赤にさせていると、清隆さんが優しい笑みを浮かべてくれた。

「うん、本当にそうだね。あの辺りはルビーみたいだ」

その笑みに、心臓を鷲掴みにされた。

またこの素敵な笑顔が見られるなんて、生きててよかった！ 神様ありがとう！ その

う叫びたい気分。

「……宝石、好きなんですか？」

「うん、宝石も好きだし、何の変哲もない石も好きなんだ。……つて少し変かな？ よく変だとは言われるんだけど」

私は慌てて首を左右に振る。

十二年前と変わらない趣味に、少し安堵あんどした。昔も素敵だったけれど、今の彼には大人の色気がある。と言うか、少し変わってしまったように見えたから。

「あの辺は、サファイアみたいだね」

会話を続けようとする清隆さんに、私は黙って頷いた。

子供の頃よりも更に魅力的に見えて、夜景よりも清隆さんの方ばかり見てしまう。

清隆さんの綺麗な瞳に、宝石みたいな夜景が映っていて、とても綺麗。ちっとも目が離せない。

「何か僕の顔に付いてる？」

「え!? いえ! あ、の……」

こっそり見ていたつもりだったけれど、気付かれてしまっていたらしい。

突然の質問に舞い上がってしまったって、うまく話せず更に焦ってしまった。

清隆さんは、私の心はお見通しのように、それ以上は深く追及せずにお酒や料理の好みを聞いてくれて、話を逸らしてくれた。

もっと上手に話したいのに……

勇気が欲しくて、目の前のグラスに入った鮮やかな色をしたカクテルを口に含んだ。

アルコールが入ると誰でも気が大きくなるものだ。

アルコール様、お願いします!

二杯飲んだところで、頭が少しぼんやりしてきて、さっきより幾分か緊張が解れた気がした。

「大丈夫? 食事よりもアルコールが進んでるみたいだけど、口に合わなかったかな?」

「いいえ! 違います。その、緊張しちゃって……お酒を飲んだら、少し解れるかなって」

「へえ? 緊張してたんだ?」

清隆さんは少し意地悪な表情を浮かべ、私を覗き込んだ。初めて見るその顔に、息をするのも忘れてしまう。

……こんな表情もするんだ。

綺麗な顔に覗き込まれると、心臓が早鐘はやかねを打ち始める。

少し目を逸らしながら頷くと、清隆さんがクスクスと笑った。

「……どうりでこの前とは感じが違うわけだ」

「この前?」

「プロポーズ、してくれたよね。しかも勢いよく」

「あ、あれは……その……」

急に恥ずかしくなってきた。急いで逃げよう。

あの時は、ああしないと清隆さんとは二度と会えなくなってしまうと思ったからで、今思うと随分無謀だった。

クスクスと小さく笑っていた清隆さんが、急に真面目な顔をして、私を真っ直ぐに見つめる。

……急にどうしてしまったのだろう。

もしかして、十二年前の約束を……私に会ったことを思い出してくれたのだろうか。淡い期待を壊したくなくて、何も聞けずにただ清隆さんを真っ直ぐに見返す。

「どうして僕を気に入ってくれたの？」

「え……？」

その口ぶりから、昔の約束を覚えていないことがわかって、少し落胆した。

ううん、少しじゃなくて、かなり。だって泣きそうになってしまってる。

けれど十二年前のことを覚えている人の方が珍しいと、自分で自分を慰めてなんとか涙を堪えた。必死で堪えるあまり、何も話すことができなかったのだけれど、清隆さんは私が困ってしまったと思ったのか、小さくため息をつけて言葉を続ける。

「まあいいや。どうして君が僕を気に入ってくれたかはわからないけれど、話しておかないといけないことがあるんだ」

「話しておかないといけないこと？」

「そう、大事なこと……」

清隆さんが柔らかな微笑みを浮かべた。

まるで愛を囁く王子様のように……

その甘い微笑みにウツトリする中、思いもよらないような言葉が耳を貫く。

「あのさ……結婚しても、君を大事にする気はないから」

「……は？」

今まで少しでも可愛く見えるように表情を作っていたのに、思い切り素になってしまった。けれどそんな私に気づくことなく、清隆さんは追い打ちをかける。

「あと、外で別の女性と関係を持つかもしれないし、家に帰ってこない日もたくさんあるかも」

「な、そ、それってどういう……」

頭が混乱して、ついていけない。

聞きたいことがたくさんあるのに、口がただバクバクと動くだけで言葉にならない。「だからつまり形だけの結婚になるってこと、それでもいい？」

私は悪い夢でも見ているのだろうか、夢なら今すぐに覚めてほしい。

こっそりと自分の手の甲をギョツと摘んでみる。

……痛い……ものすごく痛い。